

## 海國兵談自序（現代語訳）

海國（＝海洋国）とはどのような国を言うのか。それは、地続きで隣接する国が存在せず、四方が皆沿海部になっている国を言うのである。そこで、海國には海國に相応しい武備（軍備）があり、支那の軍書や日本で古今伝授されてきた諸流の兵書で説いているものとは異なったものになるのである。この特性を知らなければ、日本の武備とは云えないのである。まず、海國は外国からの侵攻が容易であるという特性がある。一方で攻めて来るのが難しいとも言われている。ここで言う「来るのが容易」と言うのは、軍艦こくわいぶねに乗って順風を得ることができれば、日本まで二〜三〇〇里の遠い航路も一日か二日で海上機動して来るということである。このように「来るのが容易」という特性があるので、これに対する備そなえを設けておかなければ、国防は実現しないということである。また、「来るのが難しい」と云うのは、四方が皆広大な「海」という障害しやうがいであることから、妄りに来ることはできないということである。しかしながら、その天然の障碍しやうがいを待みにして、備そなえを怠るようなことがあってはならない。こうしたことを考慮するならば、日本の武備は、海外からの侵攻を防ぐ術を知ることが差し当たっての急務である。さて、海外からの侵攻を防ぐための術は、水戦（水上戦闘）にある。水戦の要かなめは大砲おおつつにある。軍艦と大砲の二つを十分に保有することが、日本の武備のあるべき姿であって、支那・タタール（＝モンゴル高原〜シベリアなど）といった山国（＝大陸国）とは軍政が異なる所である。こうしたことを理解してから後に、陸戦のことに及ばなければならない。惜しいことに、大江匡房を始めとして、楠木正成や武田信玄・上杉謙信のように、世の中でいくさの名人と称していても、その根元は支那の軍書を基本として稽古に励んできた人々なので、皆が支那流の戦理

のみを伝授して、海国の教義にまで及んだ人はいない。これは、その半分を知って、残りの半分を知らないようなものである。今、私が『海國兵談』を作成するにあたり、「水戦」を本書の巻頭において記述したのは、これが海国における武備の根本をなすものだからである。日本の武備は、この水戦を第一として、その上に又一つの心得がある。その心得というのは、古代の支那と今の支那とでは、地勢も人情も共に相違しているということである。先ず日本は開闢かいびやく（国の始まり）以来外国からの来襲を受けたのは、支那が元であった時代、頻繁に軍を仕掛けてきたことである。その中でもとりわけ弘安四年には、大軍によって押しかけて来たけれども、幸いにも神風にあつて全滅させられたのであった。これは、元の君主が北方の人種であり、モンゴル高原から出てきて支那一帯を征服し、占領したのであったから、元の時代には漢民族と北方の異民族が一体になっており、北の辺境での戦いも止み果てていた。こうしたことから、遠くまで兵馬いぐま（＝軍勢）を出すことにも後顧の憂いがなかったので、度々軍を仕掛けてきたのであった。これについて、支那の時勢を考察しながら概観してみよう。夏・殷・周の三代は言うに及ばず、秦や漢までは、日本の広狭、並びに海路等の事を詳しく知ることができなかったのである。唐の時代には頻繁に日本と往来して、海路や国・郡等のことまで詳しく知るようになったけれども、互いに友好関係を深めていたことから、侵攻し、来襲するには及ばなかった。宋代に至っては、その王朝の風儀が懦弱だじやく（＝無気力で弱々しい）であったので、これもまた来ることができなかったのである。さて、宋を滅ぼしたのが、北の異人種である蒙古、即ち元である。元の兵馬が度々日本にやって来たことは、前に述べたように漢民族と北方民族が一体になって、その境界地域での戦いが止んだことから、遠くに軍勢を出しても後顧の憂い

がなくなったからである。その後、明の世祖が元を滅ぼして支那を再興し、その政事も柔弱ではなく、よく国家統一の業を成し遂げたのであった。この明代に日本を侵略しようという謀議があったのだが、北方民族の大敵が日夜頻繁に襲いかかってきたので、遠く海を涉って来るだけの余裕は無かった。その上、太閤・豊臣秀吉の猛威は、朝鮮を陥落させて、北京までも攻め入らんとする勢いであった。これに辟易してへきえき日本に侵攻してくる余裕も無いうちに、再び北方民族（≡タタール、ここでは満州族）に滅ぼされて、清朝の康熙帝こうぎてい以来、漢民族と北方民族が再び一体になって、今はいよいよ強固に統一され、北の辺境もさらに平穩無事な状態となった。こうしたことから、清国は遠方に兵馬を出すのにも、後顧の憂いが無いのである。その上、康熙こうぎ、雍正ようぜい、乾隆けんりゅうの三帝は、それぞれに文武に秀で、簡単に屈しない強い精神にして、よく時勢を見抜いており、十分に支那を手なづけて統治している。絶対に明朝までの支那と同視してはならない。まず、今の清国をこれまでの支那と比較すると、土地もこれまでの倍であり、武芸も北方民族のやり方を伝えてよく修練されており、人情や欲望も北方の気質を受け継いで剛強へと移り変わったことから、ついには北狄（≡北方の異民族、匈奴・韃靼などの遊牧民族）の欲深くてけちな心根が次第に支那にも推し広まり、それまでの慈悲深く人情に厚い風儀もいつの間にか消滅していった。しかもまた、世間に出回る書籍も次第に詳しいものになってゆき、また日本との往来も頻繁になった上、人の心も月日を重ねて賢くなってきたので、今では支那においても日本の海路や国郡等の情報も詳細に知ることができるようになった。密かに思えば、もしかしたらこれから後の清帝が、内患が無い時に乗じて、しかもかつて元朝が成し遂げた業績を思い合わせて、いかなる無分別な侵略を意図することもなしとしない。その時

に至っては貪欲な心が根本にあるのだから、日本の仁政にも懐柔されるようなことなどありえず、また兵馬億万の多さを恃みとすれば、日本の武威にも畏れることがないだろう。これらが、明までの支那と同じものではないという理由である。また、この頃はヨーロッパのロシア人がその勢い無双にして、遠くタタール（＝満州・モンゴル高原など）の北部地域を侵略し、最近ではシベリアを侵略して、東の限界であるカムチャツカから先にはこれ以上取るべき国土が無いことが判ったので、再び西に反転して蝦夷の東にある千島を手に入れようとして機をうかがっていると聞き及んでいる。すでに明和八年（一七七一年）ロシアからカムチャツカへ派遣されていた豪傑バロンマオリツツ・アラアダルハン・ルベンゴロウという者がカムチャツカから船を発して日本に渡航し、各地の港にて縄を下ろしてその深さを計りながら日本の外周の半分以上を乗り回したことがあった。その中でも土佐の国においては、日本国に在留するオランダ人宛と認められる書を遣わし置いたという事もあった。これらの事をなした根底にある真意をこそ憎むべきであり、恐れるべきである。これは、海国なるがゆえに来ることが無いであろう船も、乗船している者の機転次第ではいとも容易に来ることができるといふことである。よく察するべきである。さて、海国の特性と支那の時勢とを理解することができた上で、さらに一つの心得がある。その心得と云うのは、「偏武（＝武に偏ること）」に陥ることなく、「文武両全」であらねばならないということである。このことを常に心掛けねばならない。武に偏れば粗野になる。元より「兵」は凶器である。しかしながら（兵は）死生存亡に係わるものであり、国の大事はこれに過ぎるものは無いので、粗野にして無智である偏武の輩には任せられないのである。こうしたことから日本の古代においては、都に鼓吹司と淳和くすいし、熨

学の二つの院を置き、国々には軍団と郷学とを置いて、皆が文武を教わっていた。又、孔子も文武両全の意義について述べて、「文事有る者、必ずや武備有り矣」と申していた。その他にも黄石公は、文武相並べて国家を治め、人民の生活苦を救わねばならないということを述べ、司馬穰苴しばじょうしよ（春秋時代の齊の將軍）は、治世にあつて戦いくさを忘れないことが国家を保護する道であると言っている。その他にも晋の六卿、齊の管仲、漢の二祖、蜀の孔明、我が神祖（神武天皇か？）の如きは皆文武両全の旨を会得した人々である。それ以外にも兵を談ずる人は日本にも支那にもあまた数多あれども、皆それぞれにその得意とする所だけを伝授している「一方ぎぎの兵家」なので、両全と言うには及ばないのだ。かつ又、戦闘の道（戦術・戦法）には、それぞれの国土に応じた流儀がある。その概要を論じるならば、日本ではその軍立はいくさたて小競合いである。第一の戦法とするので、その鋒先は鋭いけれども、その方法が粗雑なので持重じちよう（敵に軽々しく動かされず、慎重に行動すること）と評されるほどには為し難い。支那は理論と方法を重んじて謀計が多く、持重を第一義とするため、その軍立は堂々としているが血戦に至っては甚だ鈍い。これらの事は日本と支那の両国の軍記を読んで味わえば、その鋭と鈍とがよく判る。これは寛永の頃に渋谷八右衛門、濱田弥兵衛等たった九人で台湾へ押し渡ってオランダの將軍（城主）を捕虜にしまった例ためしもあり、安永年間に私が肥前の鎮台館に遊事（安永六、七年、長崎奉行・柘植長門守の一行に同行して長崎に滞在）していた頃、崎陽の在館で唐人六十一人が徒党を組んで反乱を起こした時に、我が党十五人が鎮台の命令を受けて相向かい、即時に六十一人を討ち破り、彼らの楯籠たてこもっていた工神堂だいくかみを破壊して帰ってきた。この時に支那人と

手詰めの勝負を為して、彼の国の人が力戦に鈍いことを私自身で試みて知ることができた。又、ヨーロッパ諸国は大小の火器を専ら使用して、その外にも飛び道具が甚だ多い。もつとも艦船ふくねの制度は優れて細かく定められていて、船軍ふねぐせに長じている。特にその国には非常に優れた法体系があり、よく統治して国民相互の親睦が深いため、それらの国内で攻め討つ事（＝内戦）は無く、ただ相互に協力して他の州（国）を侵略して自国が占領することに、昔から今まで勉めてきており、決してその国内において同士討ちの戦争（＝内戦）をしないのである。これは日本や支那等が全く及ばない所である。兵を指揮統率する者（兵に携わっている者）は、この三つの軍事情勢をよく会得して、臨機応変すれば、天下をほしいままにできる。そもそも日本が海国であるという特性と、今の清国が昔の支那より優れているので、日本は油断してはならないという事実、そして日・支・欧三つの地域でそれぞれ戦闘の基本的な流儀に違いがあるということ、これら三つの教えは、日本のこれまでの兵法家が未だに発言していないことである。これらが未だに発表されていない理由は、昔から今までの軍学の先生方が皆、支那の書物に基づいてよい方法を考えだそうと努めてきたので、自然に支那流に陥ってしまい、かえって海国には海国の兵制があることに気がつかなかったからである。今、私が初めてこれらに言及したのは、深く憂慮する所があつて広く問い、切に考えてのことである。この趣旨のことを理解できたとしても、尋常の世人は決して口外しようとはしない。口外しようとしなのは、身を謹んで遠慮して黙っているからである。私は直情径行（＝感情のおもむくままに行動する性格）で孤独な男であるから、何ら恐れはばかることが無い。それゆえ「ベンゴロウ（＝明和八年にカムチャツカからやって来て日本中の港の水深を測ったロシア人）」の事を始めと

して、日本中の全てが外敵の来るのが容易であるという特性をありのままに出し、それによって海国に肝要な武備（＝軍事力による守備態勢）はこのようなものであるという事を「肉食の人々（＝欧米人）」に知らしめてやりたいと思ったので、これまでに見聞してきたことを集めて編纂し、この書物を作成した。これは、私のような一介の者で、徳がどうであるか、地位がどうであるかなどは眼中に無く、ただ海国の守りをどうするかということだけに心を患<sup>わずら</sup>わせてきた所以（＝理由・いわれ）である。しかしながら私は、非常に身のほどもを超えたことをしてしまった。罪を免れないことは承知している。そうではあるが、（林子平という）「人」を捕らえるべきではなく、（林子平の）「言論」をこそ捕らえるべきである。これこそが私のような一介の者が徳や地位などはどうでもよくて、この書物を作成することで言論により当世に警鐘を鳴らすことの意味するところである。こうして書物が完成したことを私自身、貴重なことだと思っている。そうは言っても、私には才能が無く、文献も不足している。それゆえにそれぞれの字が句を成しておらず、それぞれの句が章を成していないので、観る者をして読法に苦しむであろうことを恐縮している。そうは言うものの、初学者が（兵法修得の）一端をここに開いて、文を以て戦法を潤<sup>じゅん</sup>色（＝色を塗り光沢を加える）し、武を以て文華を助け開くことの趣を会得し、文と武のどちらもその精髓にまで至ることができれば、即ち国や家を安らかにさせて海国を保護する一助となるに違いない。密かにこれを『日本武備志』と言ったとしても罪にはなるまい。ただし、その文章の拙<sup>つたな</sup>さゆえに、その意図するところを誤解されないことを切に願うのみである。

時天明六年丙午夏

ひのえうま